

---

# 東方超雷光

雷道一茶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方超雷光

### 【Nコード】

N7245Y

### 【作者名】

雷道一茶

### 【あらすじ】

ある日自分の頭上に雷が落ちてきて死んでしまった空守 来は白い空間にいた。いきなり頭に声が響くところは神がつくり出した空間らしい。なんか神が間違っただの頭上に雷を落としてしまった俺は死んでしまったらしい。なんでも願いを五つ叶えて並行世界の地球に転生させてくれるとか。最強・チート・転生もの注意!!!

## プロローグ

……うう……ここ……ここは？

俺は、目が覚めると何も無い白い空間にいた。

周りを見渡してみるが、やはり真っ白でなにもない。

俺は、何故こんなところにいるのか思い出してみようとするが何も思い出せない。

だが、名前などは覚えている。俺の名前は空守そらかみ 来らいという。普通の高校生だ。

家族は、みんな事故で他界してしまっただけからはアルバイトをしながら一人で暮らしている。

俺は、自分についての情報をまとめていると頭の中にこえが響いた。

『人間よ』

だ、誰だ?!

俺は、周りを見渡すが誰もいない。

『私か？私は君たちで言う神という存在だ』

神だと？

『ああ、そつだ人間よ』

……証拠でもあるのか？

『証拠か……』

神がそつ言つと

『そつだな、お前の両親はお前が中学生のころに交通事故で死んだんじゃないか？』

！???な、なんでそのことを!!!???

『私が神だから……じゃ駄目かな？』

………わかった、信じるよ。

『そつか、ありがとう』





それで俺は天国か地獄のどちらかに行くのか？  
俺が、そう神に聞くと神は

『いや、行かない』

神がそうやってきた。俺が、なぜだ？と聞くと神は

『君の場合は私が殺してしまったという例外で転生させることにな  
っている』

転生？あの二次創作とかによくある？

『ああ、そうだ。それに転生するに置いて五つの願いを叶えてあげ  
よう』

叶えてやると言われてもな、まずどんな世界に転生するのかわから  
ないと決めようがないんだけど。

『君は地球の並行世界に転生する。細かく言えば東方project  
tという世界だ』

東方project？

俺はなんだそれ？と思って神に聞いてみると同人ゲームの世界らしい。

そのほかにも小説や動画も作られているらしいってなんでそんなに詳しいんだよ？

俺がそう言つと神が『……………秘密だ』と言って教えてくれない。

別に秘密にする必要はないと思うけど……………俺がそう思っている  
と神が急かすように言ってきた。

『それで、願いはなんだ？早く言ってみろ』

……………どうゆう世界かはわかったけど、その世界にはどんな能力  
を持ったやつがいるんだ？

『そうだな、有名なので言えば境界を操る程度の能力とか、主に空  
を飛ぶ程度の能力があるな』

境界を操る？よくわからん能力が出てきたな。

それに、「主に」空を飛ぶというのはどうゆう意味だ？

なんで、程度なんてものがつくんだ？別につけなくてもいいと思う  
が。

俺がそう考えていると神がいきなり俺の疑問についての答えを言っ  
てきた。

『仕方ない、君の疑問に答えてあげよう』



えっ？俺口に出してたっけ？  
そう俺が言ったがスルーされた。

『まず境界を操る程度の能力についてだが、この能力はだた物理的な境界つまり空間とかのことを指すな。それだけじゃなく夢や現実・物語の中と外といった概念的境界も操る事が出来るチート能力だ。次は主に空を飛ぶ程度の能力について教えてやろう。これは重力から浮いて無重力になって空を飛ぶほかに、精神的なものや物質的なもの等ありとあらゆるものから浮くことができ、どんな攻撃もすりぬけてしまう言わば無敵能力さ。最後になぜ程度と付くのかだが、  
.....分からん』

.....ハ？

結構期待させといてわからないって、神だろ？  
俺がそう言つと神は焦ったように

『し、仕方がないだろう！私にだってわからないことの一つや二つあるわ！？』

そーゆーものかー（棒

『なんだ！？その棒読みは！？』

ごめんごめん、それで能力だっけ？

『あ、ああ、そ、そうだ（切り替えが早いな。いや、それは私もか）』

能力があゝなんかあるかな、………待てよ、別に能力じゃなくてもいいんじゃないか？俺はさっそく神に聞いてみた。

なあ、別に能力じゃなくてもいいんだよな？

『ああ構わないぞ』

それじゃあ、ずっと幸福でいられるようにしてくれ。

『わかった。だがそれは能力の部類に入るぞ？』

えっ？そうなのか？俺がそう聞くと神は

『ああ、東方 project の世界には無いが新しく能力を作れば「永遠に幸福である程度の能力」なんかがいいんじゃないか？』

なるほど、そんなかんじなのか。なら「ありとあらゆることの答えを出す程度の能力」とかは？

『つまり、答えを出す者だな』  
アンサーターカー

なんで知っているんだ!?

俺は心の中でそう叫んだ

『わかったぞ、後三つだ』

まだなにかあるか?.....そう言えばこの世界ってかなり危険なはずだよな?身を守る能力が欲しい所だよな、でも何にも思い付かないし、神のお任せでいいかと思ひ神に言った

自分の身を守る能力なら何でもいいよ

『つまり、私に決める.....と?』

コクつと俺は頷いたすると神はわかったと言って

『私に任せたことを後悔するくらい最強の能力を授けてやるう』

.....何だろ?神に任せたのは失敗だったか?  
俺がそう考えていると神が確認するように言ってきた

『君の能力について確認するぞ?「永遠に幸福である程度の能力」に「ありとあらゆること」の答えを出す程度の能力」でいいかな?そ

れと、三つは私が決めるということで』

ああ、それでいいよ

俺がそう言つと神は最後にすまなかつたと言つと目の前に金色の扉が現れた

『この扉を通れば自動的に転生される』

そうか、と俺が答えると扉へ向かって進んだ。すると神が達者出なと言ってきたので俺は

おう、とだけ言つて扉を通つた

## 第一話

チュン チュンチュン

んっ？……………朝なの……………か？それにしても暗くないか？……………そうか、瞼を閉じているからか。  
俺は、この真つ暗な世界から明るい世界に行くため重たい自分の瞼を開いた。

んっ、やっぱり眩しいな。流石は太陽の光だ。俺の眠気を一気に覚ましてくれた。けどどなんか身体中が痛い。まるで地面に寝たみたいだ。俺は周りを見渡してみる。……………特に変わった所は無い。森があるだけだ。……………森？なんで森なんだ？！……………ああ、思い出した。たしか神に転生させてもらったんだっけ？とうゆうことはここは東方 projectの世界ってことか？でも神もこんな森の中に転生させなくてもいいのに。何か出てきたらどうするんだ。身を守る能力については三つ任せて頼んだけど俺は知らないぞ？どんな能力か。……………失敗したあああああ！！！！？？？

俺は、負の念を心の中で叫んだ。

三つ貰っても知らなきゃ使えないじゃん！？いや待て、神がそんな浅はかなことをするはずがない。  
きつとポケットとかに能力についての説明書みたいなものとかがあ

るはずだ……………多分。  
俺はさっそくポケットの中を調べてみた、……………やっぱり有ったぜ。  
少し分厚い紙が。俺はその紙をポケットから出して見てみる。  
そこには、

『のーりよくせつめーしよー5歳の子供でも分かる  
簡単編！ー！』

……………表紙は無視しよう。うん、無視だ無視。大事なのは中身  
の内容だよ、表紙なんてどうでもいいんだよ。  
俺は、まず1ページ目を開いて見てみる。

『まずうー「永遠に幸福である程度の能力」についての説明でえー  
す。』

今思ったけど漢字使っている時点で5歳の子供読めなくね？それに  
少しイラつくんですけど？

そう思いながらも俺は説明書を読んでみる。

『まず、この能力についてですけどおーその名の通りにいーずじじ  
うううじじじと幸福になれちゃいまあーす。いやーいいよねえーず  
じじじううじじじと幸福なんて……………ねえ？』

…………… イラつく!!! 破り捨ててええええ!!!  
?????????

いいいいいや!!! 破り捨てた後に燃やして灰にしてやりてえええ!  
!!!

いや!でも待て!!! 耐える耐えるんだ!!! 俺!!!!!!

これを破り捨てて燃やしてしまったら俺の身を守る能力について永  
遠に分からなくなるじゃないか!!!

まずは落ち着こう、ヒーヒーヒーヒーヒーヒーヒー。

…… よし、落ち着いたぞ。俺は続きを読むため次のページを開く。

『つ・ぎ・はわああ「ありとあらゆることこの答えを出す程度の能力」  
について説明しまあす。』

…………… これって多分あの神が作ったんだよな?だとしたらかなりキ  
ヤラ崩壊というかなんというか…………… でもきつと違うよな、きつと

…………… じゃないとキモいし。まあ、続きを見ようか。

俺は自分の思考から抜け出して視線を説明書に向ける。

『この能力はあわ超便利でえゝす。本当にいゝどんな状況う、疑問、  
謎とかのおゝいろんなことについてえゝ瞬時に答えを出してえゝく  
れますうゝ。』

…………… もしかして、この能力で俺の身を守る能力分かるんじゃ  
ない?

俺のバカヤロウツツ!!!?????なんで自分で頼んだ能力の事思いつ

かなかつたんだよ！！？？？

俺のバカ！？？だつたらこんなイラつく説明書読まなくても良かったのに……ッ！？？？

んっ？『追伸』？何々え〜と？『この能力を使って身を守る能力を調べないでねえ〜。使った瞬間君の持っている、と言つても私が上げた能力なんだけどねえ。消えちゃうから』

………ハアアアアアアア！！？？？？

何！？それじゃあ俺にこのイラつく説明書を全部読めってか！！？？チクシヨウツ！！？？？ハッ！？落ち着け！俺ッ！やつ（神）の誘惑（多分）に乗るな。

きつとこれは俺をイラつかせるためにやっているんだ（…多分）。

落ち着け、ヒッヒッフー…ヒッヒッフー…よし、

俺はもうこいつ（神）の誘惑（…多分）にも引つかからないし、驚いたり、イラついたりしないぞ、うん。

さて、さっさと読んじやいますか。

俺は次のページを開く。

『ここからわああ、私に頼んだ身を守る能力なんだけどお〜すっごくチート・最強だから腰を抜かさないで見・て・ね？』

俺は、次のページを見る。

えっ？イラつかないのかって？だから言っただろうさっきイラついたりしないっさ。

………じゃないと見ていけないもん（涙）………

なんかへんな電波を受信しながらも説明書を見ていく。

『ま・ず・は、一つ目でえ〜す。私が一つ目に上げる能力は「超人



「なる程度の能力」でえ〜すう。」

超人？何だ、スパ ダーマンとかウル ラマンとかスー ーマンあたりのことか？

『せい〜い。でもどれかって言うとう トラマンのほづが近いかなあ〜？』

………なんで、俺の考えている事がこの説明書に書いてあるかは無視しよう。

でもウルト マンに近いってもしかして凄いチートなんじゃないのか？

『そうだよ〜すごいチートだよ〜ん。身体能力なんて ルトラマンだし〜しかもお、色々な超能力に気力だつて使えちゃうんだからあ〜ん。生命力とかだつてえ〜不老不死にすつごく近いしそれに宇宙や水中でも活動できるしねえ。あつ、でも攻撃の光線技とかは使えないからあ〜例えばスペ ウム光線とかねえ〜。』

えっ！？なんでだよ！？？使えてこそそのウルトラ ンだろ！？？  
実際はウルトラマ じゃないけどさ！！？？？

『たしかにい〜攻撃の光線技は使えないけどあ〜それ以外の光線技なら使えるから安心してねえ〜ん。』

どういうことだ？

俺はその疑問を解決するため続きを見る。

『そうねえん。例えばあゝ誰かに自分のエネルギーを与えたりとかあゝ壊れたものを修復したりする光線技は使えるのよねえゝ。わかっただかしらあゝ？』

それなら、ス シウム光線とかも使えるようにしろよ。

『さあゝて、次は二つ目の能力「電気と雷を司る程度の能力」について説明するわねえ。』

……俺のこの質問については無視かよ……

まあいいや。それで？電気と雷を司る程度の能力か？見る限り電撃系の能力だよな。

でもなんで電気と雷を司るなんだ？どちらか一つでいいと思うけど

……

『そうだねえゝ、電気を司るだけであゝ電気全般を操る事ができるけどあゝ雷を発生させる事とかができないのよあゝそれに雷を司るだけであゝ雷は操れるけどあゝ雷じゃないただの電気とかは操れなくなるのさあゝ。分かったあゝ？』

なるほどね、よくわかったよ。

ほかにはどんなことができるんだ？この能力は。

『さつきも言った通りいゝ雷と電気を操る事が出来るしいゝ雷の発生や雷速での移動にいゝ電熱を発することができるんだよゝ。それにいゝ自身の体を電気と化すことで攻撃を受け流すことができるしねえゝ。まだ、他にもあるけどおゝ長くなりそうだからあゝそれは自分の能力で調べてねえゝ。』

つまり、ありとあらゆることの答えを出す程度の能力で調べろってことか。

よし、とうとう次で最後になるのか……………永かったぜ……………ッ  
!!!????

俺は最後の能力説明を見るのに気合を入れ直した。

そして俺は、最後の能力説明のページを開く。

『とうとう最後の能力説明になったな。』

えっ!?!まさかの普通文章!?!?なんでここに来て普通の文章にもどってんだよ!?!?

どうせなら最初っからこっぴつ真面目な感じの文章にしてくれよ!?!? すっげー!?!?!?!疲れたぞ!?!?!?

『だってそれの方が面白そうだったからな』

こいつ……ッ!?

ぜってえードSだなッ!?

もうイラつくかないって言ったけどもう我慢できねえ……!?

今度会ったらぶ・ち・こ・ろ

・す……ッ!??

俺は心の中で誓いを立て、最後の説明文を読む。

『さて、最後の能力についてだけどこの能力の名前は「無にする程度の能力」だ。』

無?ないってことだよなつまり。

『そつだよ。無にする、つまり無くす・無かったことにすることが出来るんだよ。』

まんま大嘘憑き(オールフィクション)じゃねえかよ。

『うん、まあな。でもこれは自分か自分が触れたことがあるものしか効果がないからな。でもその代わりに無くす・無かったことを無かったことにできるからな。』

……ホント、チートだな。

でも、これで俺の能力はわかったし、一安心つてところかな？俺は説明書を閉じて地面に座った。ずっと立ってて足が痛くなっただけだからな。俺は座ると説明書を俺の前に置いた。そして俺は、ある事にきずいた。

『追伸』

俺はこれを見たとき、「まだあったのかよ。」と思った。仕方なく俺は追伸の先を見た。

『転生の際にちよつとミスっちゃって、人間のいない時代に送っちゃった。やつぱり旧式の転生システムじゃ少し欠陥があったんだよね。ゴメンね？テヘツ』

b y 女神様？』

.....ハアアアアアアア！！！！？？？何それ！！？？

ふざけんなよ！？？人間いないとかどんだけだよ！？？

しかも転生システムって、そんなのがあるのかよ！？？もしかして俺以外にも神のやつらいっぱい人を殺しちゃってんじゃないんだろ？うな？だからこんなシステムできたんじゃない。

俺がこんなことを考えていると俺の能力の一つ、ありとあらゆることとの答えを出す程度の能力が肯定してきた。俺は、「やつぱりか。」と思い、もしかして神どもはすつごくドジなんじゃないか？とも思った。

しかし俺としては、

最後のテヘツ　が気に入らない！もう少し悪かったと思えよ！？  
絶対こいつ笑ってるぞ！？あつ、でもこいつドS（多分！）だよ  
な？

こんなこと思っていたらやつと思惑通り（多分！（キリッ）なんじ  
やないか？

………　フッフッフツ…　もう俺はこいつのペースに乗らないし、ツツ  
コミを入れないぞ。

俺はそう誓い最後にもう一度説明書の追伸を見る。

………　えっ？  
言葉を失った。だって最後に！

『by　女神様？』

って書いてあるんだから……　ツ！！

あいつ、女だったのか………　！！！！

全然わからなかったぞ！？姿が見えなかったとはいえ！？？  
結構最初の方に驚かないと言ったが、これには素直に驚いた。  
だって女神だったなんて！チクシヨウ！？俺は紳士だ！  
女をぶち殺すことなんてできないぞ………　クソツ！！！！

………　ぶち殺すのは諦めよう。女じゃ手が出せないからな。







## 第二話

やあ、こんにちは。空守 来だよ。実はな、いきなりだけどあの忌まわしい爆発事件？から百年経ったんだよ。えっ？なんで百年経ったのが分かったのかって？そんなの能力で調べたに決まってるじゃねえか。わからねえやつは、第一話を見る事だな、って何を言ってるんだろうな俺は。

百年も生きてとうとうポケてきやがったか？はあ、嫌だよねホントに。

あつ！そうそう！この後いつ人間が誕生するかだけど、後九百年位はかかるみたいなんだ。

妖怪とかだったら後七百五十年位したら誕生するらしいんだけどな。

恐竜みたいなのはもう居るんだけど……………

それに、この百年間で俺は強くなった。能力を完璧に使いこなせるようになったしね。

能力の効果だつて上がったんだからな。電気と雷を司る程度の能力の電圧だつて十億Vから十一億Vにあがったし、雷速の移動速度だつて200？/秒から225？/秒に速くなったしな。

でも、なんで雷より速く移動できるようになったかと言うと、俺の能力の一つで無にする程度の能力で俺の能力の限界、つまり雷の速さの限界を無くしたんだ。だから俺は雷より速く移動できるようになったんだよ。

いやあ、ホント便利だぜ。

それに超人になる程度の能力で、気力やいろいろな超能力だつて、使いこなせるようになったしな。身体能力だつて少しではあるが上がった。なぜ少ししか上がってないかと言うと、身体能力より気力や超能力を使いこなせるように鍛錬したからだ。そのお陰で気力・超能力がちゃんと使えるようになった。

まあ、この百年の成果はこの位かな？  
それにしても、

「さっさと人間誕生してくれないかな。」

これは、俺の心からの願いだ。早く人間に会いたい。  
伝説のウル　ラマンみたいに時を越えられないか試してみたが無理  
だった。

でも、毎日鍛練をしていればできるようになるらしい。  
俺としてはさっさと時を越えてこの恐竜のいる時代からおさらばし  
たかったのだがな。

まあ、超能力とかの実験台になってくれたのは感謝しているが……

……

恐竜たちが実験台になってくれたおかげで電撃をウルト　マンの光  
線技みたいに放つことができるようになったわけだけど。

いやあ〜あの時は本当に泣いて喜んだね！

それほど嬉しかったんだよ。みなさんに見せたいくらいだよ。  
て、みなさんって誰だよ？やばい、またボケが………ハア〜。

俺はもうだめなのか？と思ひ、ため息を吐いた。  
その時、

『グギヤヤヤヤツツ！！！！？？？？？』

鼓膜が破れるような遠吠えが聞こえた。

俺は「あいつか……」とめんどくさそうに言った。

この遠吠えは俺がいつも相手をしている恐竜の遠吠えだ。

いつからこの遠吠えの恐竜の相手をしているかと言うと、もう5年は経つ。

いつも俺に挑んでは、俺の技の一つで興奮を抑制する働きがある光線をくらっては、戦意喪失して帰って行くのだ。

何故一々こんなことをするかというと、俺はめんどくさい事は避けたいからだ。

来るなら俺が鍛練をしているときに来て実験台になってほしいものだ。

ドスン！！ドスン！！ドスン！！

大きな足音が聞こえ、俺はその方向を見る。

そこには、やつが俺をまつすぐ見据えていた。

やつとの距離もざっと見て50〜60m位だろう。

どちらももう動き出そうとしているが隙がない。

やつは、また会ったびに強くなっている。

どこかで鍛練しているのかと思うくらいの伸びだ。

いや、でも俺と一応戦ってはいるからそれでそれなりに鍛えられているのかな？

ハハハ、そんなわけないか。

『グガアアアアツ！！？？？』

?!!

俺が思考している間にいつの間にかやつは目の前にいて俺を襲ってきた。

俺はそれをジャンプをしてかわした。  
そしてマツハ１の速度でやつの尻尾のあるところへ移動し、尻尾を  
掴みジャイアントスウィングお見舞いしてやった。  
やつは160m位吹っ飛んだ。だがやつは何事も無かったかのように  
に立ち上がりこちらに向かってきた。

「おいおい、無傷かよ。半分くらいの力で投げ飛ばしたのによ。」

マジで強くなつていやがる。防御力も上がつていやがるのか？あの  
スピードといい、なんなんだ？あいつはよ？この分だとパワーも相  
当が上がつてんじゃないかねえのか？

一回力比べを試してみるのもいいかもな！

俺もやつに向かい飛び蹴りを放った。だがやつは俺の飛び蹴りを腕  
で受け止めて俺を投げ飛ばした。

俺は空中で体勢を立て直し地面に着地した。

俺はやつのが俺の予想を遙かに上回っていることに驚いた。

まさか俺の飛び蹴りを難なく受け止めるとはな…。

もう少し力比べをしてから、ライトフルレクト（興奮抑制光線）を  
放つことにするか。

俺はそう決めるとやつに瞬時に近づき、顔面にパンチを打ち込んだ。  
やつは少し怯むが、すぐこちらに尻尾を振りまわして攻撃してきた。  
俺はそれを飛行してかわし、今度は8割位の力でもう一度やつに飛  
び蹴り放った。

やつもすぐさま俺の攻撃に反応して、巨大な腕で俺の飛び蹴りを受  
け止めてきたが蹴りの力に押されて、後ろへ吹っ飛んでいった。俺  
は「もういいかな？」と思い、俺の技の一つであるライトフルレク  
トを放つ。

右掌から放たれた光の粒子がやつを包み込み、やつの戦意を無くし

ていく。

俺の右掌から光の粒子が消えたと同時にやつは戦意喪失し、帰って行った。

まったく、あいつには学習能力というもんがないのか？

でも今度からはちゃんと身体能力の方も鍛えないとな。

じゃないと身体能力でいつか俺あいつに負けるぞ、絶対に。

まずは、腕立て伏せ1万回位かな？

新たな目標？ができる俺はさっそく行動に移そうとしたが……………

グウウウ~~~~

……………まずは、腹ごしらえが先だよな。

俺はそう思い、古代の魚を捕獲するため近くの川に向かった。

## 第三話

「9万9985回、9万9986回……」

おゝす。俺、空守 来だよ。俺が自分の体を鍛えて900年はたった。もちろん能力の方もちゃんと鍛えてるぜ。

今もその最中さ。

俺は今、直径数百mの巨岩を片手で持って腕力を鍛えている。こんなことをやっていると本当に自分が人間なのか疑問になってくる。

「9万9999回……10万回ツと！よし！今日はここまでにしとくかな。」

俺は、持っている巨岩をゆっくり地面に置く。すると、少し離れたところから栗色の髪を肩まで伸ばし、瞳も栗色の小さな女の子がやってきた。

「お疲れ様です！来さん。」

その女の子が言うと、俺に大きな葉っぱをコップの形にしたものを渡してきて

その中には澄んだ水が入っており、俺はその水を飲んだ。

「ゴクツ、ゴクツ、ふう〜。生き返ったあ〜ありがとう。栗菜<sup>くりな</sup>。」

俺はそう言つて栗菜の頭を撫でてあげる。

栗菜は、「えへへ／＼／＼」と嬉しそうに目を細めていた。

この子は、人間のように見えるのだが実は妖怪である。

まず人間自体生まれてないしね。

栗菜との出会いは10年前に遡る。

あれは、俺が修行していたときだ。

助けて！！と悲鳴が聞こえたのだ。俺はその方向に行つてみると血だらけの少女が恐竜に襲われていたのだ。俺は、その女の子を助けようと恐竜に電気と気を纏った飛び蹴り・ライジングキックを放つ。

恐竜はライジングキックをくらうと数十メートル位吹っ飛び、絶命した。

俺は、急いで女の子に近寄り無事かを確認した。

見た感じは大けがに見えるがそこまで酷くなく、回復光線・ライトフルエイドを浴びせて回復させた後、

気絶していた少女を寝かせた。

少女は2時間くらいすると目覚めた。

最初は俺に怯えて泣いていたが、なんとか泣き止まず事が出来た。いやあ〜たいへんだった。前世じゃこんな子供の相手なんてしたことはないんだからよ。

それで、なんで襲われたのかを聞いてみると一年前に親に捨てられて、一人で旅をしているところ

あの恐竜に襲われたらしい。  
うう〜辛かったろうに（泣

俺はこの子に「家族にならないか？」と提案したところ、目を潤ませて「いいの？」と首を傾げて言ってきた。俺はロリコンではないが、かわいいと思ってしまった。

一瞬ロリコンになろうかなと思ったほどだ。

反則だろ？潤ませた目で首を傾げるなんて。

俺は「いいよ！」と即答した。

すると少女は、泣きながら喜んでくれた。

俺も嬉しかったよ。話す相手ができたし、この子も嬉しそうだったし。

まあ、これがこの子との出会いだ。俺はこの子と出会えて本当に良かったと思っている。

俺から言わせてみればこの子は、天使のような存在だ。

「?どうしたんですか？来さん？」

俺が昔に耽っていると、栗菜が頭の上に？マークを浮かべながら聞いてきた。

「いや、なんでもないよ。ちょっとお前と出会ったときのことを思い出していたんだよ。」

「そうですか。……………あのときは本当にありがとございました。



来さんには感謝してもしきれません。」

そう言つて栗菜は頭を下げてきた。  
まったく何を言つてるんだか。感謝してるのは……

「俺の方なのにな。」

「何がですか？」

「いや、何でもないよ。」

「そうですか？」

俺は笑いながら「そうそう」と言つて、誤魔化した。  
栗菜は俺を妖しげな目で見てきたが無視だ、うん。

こんな可愛い栗菜であるが実は16歳だったりする。  
見た目は幼女なのだ。

妖怪とはやはり成長が人間より遅いのだろうか？

「なあ、栗菜。」

「なんですか、来さん？」

「栗菜って16歳だよな？」

「はい、私は今16歳ですよ。」

「なんで初めて会った時と同じ姿で成長していないんだ？」

「さ、さあ？それは私にもよくわかりません。」

「ですよねえ。それと栗菜って何の妖怪なんだ？」

「10年も一緒に居るのに何の妖怪か聞いてないって………まあ、能力を使えばすぐ分かるけどプライバシーの侵害もあるからね。」

「あれ？言ってますでしたっけ？」

「たしか言ってたはずだ。」

俺がそう言つと、少し思考している顔になり、やがて顔を上げて

「……………そうでしたね。」

とやってきた。どうやらさっきは自分の正体を言ったか言ってなかったかについて思い出していたらしい。

「ああ。それでなんなんだ？」

「それでは言いますね。……………私の正体は……………

……………ツ?!」

「栗菜の正体はツ?!?!」

「私の正体はツ?!?!?!?!」

「栗菜の正体はツ?!?!?!?!?!」

「……………わかりません。」

ズテッ————!!!

ここまで引き延ばして置いて分からないのかよ?!  
思わず頭を地面にぶつけてしまったぞ?!

「分からないって、何で何だ？」

「教えられる前に親に捨てられてしまいましたから。」

「……………その……………ごめんなさい。」

「いいえ、もういいんです。私は今が幸せですから。」

「栗菜……………ありがとう。」

「だから良いですって／＼／」

ハハハ、照れてるな。それにしても幸せかあ。  
嬉しいよな、誰かが幸せだと自分も。

俺は栗菜を見ている。何かこっちに頭を向けてきている。  
やれやれ、頭を撫でろってか？良いだろう。撫でるからには徹底的  
にやっつけてやるぜ！……！！

ナデナデナデナデ。

「ふにゃ／＼／＼／」

何だろう、猫みたいで可愛いんだけど。

俺はさらに撫で続ける。

「ふにゃにゃ／＼／＼／」

……抱きしめてもいいかな？

「ふにゃふにゃにゃ／＼／＼／」

……よし、抱きしめよう。

ギュッウウウウウウ……！！

俺は栗菜を抱き締めた。それに驚いた栗菜は

「?!!!ニヤニヤニヤ……!!?!?!?!?!」

猫みたいな叫び声を上げた。……もしかして栗菜って猫又なんじゃないのか？でも尻尾がないしな。

調べてみるか？よし、さっそく許可をもらいますか。

俺は栗菜を抱きしめるのをやめ、栗菜に聞いてみる。

「栗菜。」

「ハア、ハア…な、なんですか?!いきなり抱きついて!!」

「ごめん、ごめん。それよりさ、栗菜の正体を知りたくないか？」

「ふえ？分かるんですか？」

「まあね。能力を使えば分かるよ。それでどうする?」

そう言つと栗菜は即答で、

「知りたいです!」

と言ってきたので俺は「OK」と言い、能力をしようした。  
フムフム……

「分かったぞ、お前の正体が。」

「本当ですか!?!」

「あ、ああ。お前の正体は仙狸せんりと言って猫又ねこまたって言う妖怪が年経て神通力を身に付けた存在だ。後、猫又ねこまたって言うのは猫が妖怪になった存在だよ。」

でも猫なんてこの世にまだ存在してないはずなのになんで猫又ねこまたが存在しているんだ?

しかもそんなに生きてないのにもう神通力を身に付けているなんて

…なんでだ?

俺はもう一度能力をを使い調べてみた。

……………マジですか。

調べてみたところ、猫はもう存在しているらしい。

俺は見た事ないが、普通にいるらしい。

仙狸なのは栗菜の親が仙狸だったかららしい。

それと猫又に見えないのは変化の術を使っているらしいんだが。

「あゝ来さん、思考中のところ悪いんですけど。」

「なんだ?」

「私、猫又なのになんで尻尾とか生えてないんですか？」

どうやら栗菜もその事に疑問を感じていたらしい。

「それはお前が変化の術を使っているかららしいんだけど心当たりないかな？」

「変化の術ですか……………あッ！そう言えば昔、私がまだ2歳3歳だったころお母さんになりました。そうですね！！気に入ったからそのままにしていたのを忘れていました！」

そう栗菜が言ったと同時にボンツ！と栗菜の周りに煙が出て、煙が消えるとそこには栗菜の容姿に栗色の猫耳、三本の尻尾を生やした姿になっていた。

「それがお前の本当の姿か。」

「はい、来さんのおかげで本当の姿に戻ることができました。本当にありがとうございます。来さん。」

そう頭をペコリと下げながら言ってきた。



「別に頭を下げて礼を言わなくてもいいよ。それより飯食おっせ。」

「はい!」

「今日は栗菜の正体がわかった祝いで魚にするぞ!」

「本当ですか!?わーい!」

びよんびよん跳ねながら喜んでいる。

「ならさっそく川に行って魚を取りに行くか!」

「はい!」

俺たちは魚を食べるため川に向かった。



なんて思っていた時期が俺にもありました、はい。

俺は人間が生まれて100年経ってから人間を見に行った。

何故100年経ってから見に行ったかと言うと、俺自身修行をしていて人間の存在自体忘れていたからである。

人間、なにかに夢中になっていると大切なことも忘れちゃうよね。

おっと、そんなことはどうでもいいんだよ。そんなことよりもだ。

俺は人間を見に行つて……………絶望した。

だつてよお…あんなの……………

猿じゃねえかあアツツ!!!??????

なにがウホツ！ウホツ！！だよ!!!????

あんなの少し知性を持った程度の猿じゃねえか!!

ちくせう!!俺もバカだよな。

少し考えれば分かることじゃねえか。

人間が生まれてもまだ猿人だってことはよ。

もう見た瞬間ズーンだったわ。涙もでたよ。

まあ、栗菜に慰めてもらったからいいけどさ。

それに栗菜も美少女から美女に変わった。

容姿も綺麗な栗色の髪も腰まで伸ばし、体も女性らしい体つきになった。

身長は164？位まで伸びて、胸の方もGカップはいつてる。

なんで知ってるかは密かに能力で栗菜の健康（発育）を毎日確認していたからな。

……おい、いまお前変態だろって言った奴、あえて言わせてもらおう。

俺は栗菜限定（多分）の変態という名の紳士だ！！

だから俺は栗菜のためならなんでもできる！！！！

なんで栗菜のことこんなに語ってるんだろ？

まあいいや。それよりも後どれくらいしたら人間並みの知識を持つんだろう？

千年単位くらいかかるかな？

まあ、その位かかったとしても栗菜がいるからもう寂しくはないけどさ。

なんか刺激のある事が起こってくれないかなあ

俺がそう思ったとき突然目の前が光だした。

光が止むとそこには円状の白い穴が出来ており、その中には金髪の綺麗な女性がいた。

「お久しぶりね！来君！」

いきなり円の中の女性が喋ってきた。

.....

「誰？」

ズゴツ！！?????

なんか女性がおもいきり向こうの地面に頭をぶつけたぞ？

それと同時に栗菜もこちらを向いて言ってきた。

「?どうしたんですか来さん?いきなり喋りだして?」

えっ?どうしたって

「栗菜はこれが見えないのか?」

俺は、白い円状の穴とその中にいる人？を指さしながら言った。

「えっと………何かあるんですか？」

「何かって、白い穴と人がいるじゃないか。」

そう俺が言つと栗菜は心配そうな目で見てきて

「……………さっきの事がかなり辛かったですね。幻覚を見るほどなんですから。今日はもう寝ましょう。」

えっ？寝るってまだ昼だよ？

それに俺は正常よ？多分だけどさ。

あ、あれ？ちょ、ちよつと栗菜さん？

なんで近づいてくるのかな？近づき方が怖いよ。

「あ、あの栗菜さん？なんで近づいてくるんですか？」

「それはもちろん来さんを寝かせるためです。」

「いや、いいですよ？別に寝かせなくても、はい。俺は正常ですからね？」

「幻覚を見た時点で正常ではありません。大丈夫です、怖くないから。」

いやいやいやいやいや！！！！！！！！！！

なんか怖いよッ！！！！！！！！！！しかもなんか目も光がなくなってるような気がするんですけどッ！！！！！！！！

「来さんはいつも無理をしてますからね。それが溜まってたんでしよう。昨日も私が百体位の妖怪に囲まれていたときに助けてくれましたし、それにこの前だって……………」

あゝあ、あつたねえゝたしかそんなこと。

昨日のことだけども。

「だから今日はもう休んでください。今日一日は、来さんに近づくもの全てを排除しますのです。」

……………いつからこんな怖い子になったんだろう？

育て方を間違えたかな？

「で、でも！昨日みたいにいっぱい妖怪が襲ってきたら、やばいんじゃないか？」

「安心してください。今の私なら千体の妖怪が襲ってこようと倒せ

ますので。」

うん、なんか昨日と纏うオーラがちがうもんね。  
俺もそう思えてきたよ。

そうか、なんか周りに生物の気配が感じないなと思ったたらこのオーラのせいなのか。

そんなに俺を寝かせたいのか。だが……………

「断る!!!!!!!!!!そして逃げる!!!!!!!!!!」

俺は飛び、その場を退散した。

と思ったのだが……………

「ッグ!!???」



いきなり重力が倍加したような感覚に捕らわれ、俺は地面に落ちた。クソッ！！なんなんだいったい！！？

全然立てねえぞクソッ！！？？

地球の500倍の重力なら耐えられるがこれはそれ以上だぞ！！？

「ちょっと、ストップ！！ストップ！！いきなりどこかに飛んで行こうとしないでよ。探すのが大変でしょ？」

いきなり白い穴から聞こえてきた女性の声が聞こえた。そして目の前にまた白い穴が開き、金髪の女性がいた。

「お前か、重力を操っている奴は！早く解除しやがれ！！」

「そんなに怒らないでよ、今解除するからさ。」

やつが指をパチン！と鳴らすと倍加が解かれて立てるようになった。

「ふう〜助かったぜ。それとお前は誰だ？」

「私の事忘れちゃったの？悲しいわ〜」

そう言つとオヨヨヨと顔を隠しながら嘔泣きをした。  
ああ、うざい。

「おい、うざいからやめろその嘘泣き。」

俺がそう言つとそいつは嘘泣きをやめ、

「昔と全然変わってないのねあなたは。」

と言つてきた。

はて？こんなうざい奴俺の知り合いにいただろうか？  
知り合いといつてもこの世界じゃ栗菜しかないし。  
ホント誰だ？

「あのさ、ホントに誰だお前は？」

「……………本当に分らないのかしら？」

俺はコクンと頷いた。

女性はそれと同時にハア〜とため息をつき俺に向かって言ってきた。

「私はあなたをこの世界に転生させた女神よ。」

……………ああ————ツツ！！！！！……？？？？  
……？？

あのときの駄女神か！！

「駄女神とはなによ！??」

「うおッ！？俺口に出してか？」

「出してないわよ。こんなこと心を読めばどつってことないわ。」

そこはさすが神様ってことか。

まあ俺も超能力で心を読むくらい簡単にできるけどな。

「でもむやみに心を読むのは止した方がいいぞ。嫌われるからな。」

「わかってるわよそのくらい。」

まあそうだろうな。

それよりもこいつはなんのようでもここにきたんだ？

「ああそれはね、あなたが刺激のある事が起こってくれないかなあ  
くって思ったでしょ？」

さつき心をあまり読まない方がいいって言ったよな？

こいつは学習能力というものがないのだろうか？

「あえてあなたのいあった事は無視するわ。それであなたは言ったわよね、私がさっき言ったことを。」

「ああ。言ったな。」

「それを叶えようとしてここに来てあげたのよ。」

「そうかいそりゃどうも。でも実際はここにきてないよな。」

来たと言ってもあっちの空間とこっちの空間を繋げたただけだしな。

「うるさいわね。別に良いじゃない細かいことは。」

「俺は細かい事をきにする人間なんでね。それで叶えるっていったいどんな刺激のある事を叶えてくれるんだ？」

俺がそう言つと駄女神がそうねえ〜と考え出した。  
考えて無かったのかよ。やっぱり駄女神だな。

「う、うるさいわね！別に良いじゃない！」

まあ別に良いけどさ、俺も考えられるし。

…………… あっ！そうだ、これがいいな。

「あのだ。」

「……なによ。」

あれ、少し怒ってるのかな？

顔も少し怖いし。ハア、まずは機嫌から直しますか。

「ごめん、さっきは悪かったよ。それにそんな怖い顔するなって。綺麗な顔が台無しだぞ？」

俺がそう言うと駄女神は顔を茹でダコのように赤くしてごう言ってきた。

「わ、私が綺麗ですって！／＼／＼ど、どこが綺麗なのよ！！／＼／＼／＼」

どじって言われても、

「全体的に？」

そう言うと駄女神はさらに顔を赤くした。

大丈夫かこいつ？

「おい、大丈夫かお前？気分が悪いんなら別に叶えてくれるのは今日じゃなくてもいいぞ？」

「だ、大丈夫よ／＼／＼（こ、こいつ！鈍感なの！！／＼／＼）」

「そうか？それならいいけどよ。」

まだ顔が赤いけど本人が大丈夫って言うんなら大丈夫なんだろう。健康が第一だからな。

あれ？俺なんて言おうとッ……………あっ！そうだった！

「あのさ！」

「なにかしら？」

「ウルトラマ シリーズの怪獣を相手にしたいんだけどいいか？」

これだったらかなり刺激のある日々になるはずだ。

「そうね、別にいいわよ。それでいつ送ればいいのかしら？」

そうだな、今日は急すぎるから明日くらいかな。

「明日くらいで頼む。それと怪獣の指定はこちらでもいいか？」

「それくらいなら構わないわ。」

「そうか、ありがとう。」

俺が礼を言うと少し顔を赤くして照れているようだった。

そしてそれを誤魔化すように

「そ、それで明日はいつたいなんて怪獣を送ればいいのかしら？」

そうだなあ〜結構強い怪獣と戦いたいんだよな、……………ゴ　ラあたりでいいかな？

「じゃあ、明日は　モラで頼むわ。」

俺がそう言つとやつは「OK〜じゃあね!」と言って白い穴を閉じた。

よし。明日から忙しくなるぞ。

あれ？なんか忘れてるような？

スー スー

んっ？

俺は音が聞こえた方に顔を向ける。

そこには栗菜が寝ていた。

なんで寝てるんだ？

駄女神がやったのか？あいつがやったなら感謝しないとな。

あの状態の栗菜は俺じゃあ止められなかった。

感謝感謝だわ。マジで。

それにしてもなんだか疲れたな今日は、いろいろな事がありすぎて結構前に作った家に帰って寝るかな？

そうと決まれば、俺は寝ている栗菜を担いで、家に帰った。

明日が楽しみだ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7245y/>

---

東方超雷光

2011年12月19日01時47分発行